NOTEBOOK

# あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

# 余話　人柱

**芳流（kaoru）**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15784710**

ダイの大冒険, ヒュンケル, モルグ

魔界にて。不死騎団長以前のころ(16歳くらい)。中二病全開。やさぐれてます。モブあり注意。ただし、モブとのＣＰはなし。
この話における魔界の設定に肉付けしただけの文章。
本編「７」novel/15406332を前提にしていますので、ヒュンマ風味ですが、つながりが薄いので、これのみでも読めます。

## 余話　人柱

　執務室の扉をノックする音が響いた。
「入れ。」
　ヒュンケルは、短く入室を許可した。
　ドアが開くと、そこには見慣れた側近のアンデットモンスター、くさった死体の男が立っていた。
　ここは、魔界にある屋敷の一つであり、昨年、ミストバーンがヒュンケルに与えたものだった。
　ミストバーンに拾われて、早８年。
　昨年より、ヒュンケルは、一兵卒の扱いから、将校の扱いへと変わり、客観的に見れば昇格していた。それに伴って、彼は、屋敷を与えられ、また、側近や侍女など、側仕えの者に取り囲まれることとなった。
　そして、併せて、それまでも施されていた兵法の指導、教育が本格化し、彼は、大魔王の支配地域に不穏な動きがあれば、手勢を率いて出撃することも指示されるようになった。
　ヒュンケルは、屋敷の中にあるこの執務室で、側近からの報告を聞き、また、ミストバーンの部下からの指示を受けることもあった。
　この日は、ちょうど、先日の討伐に関するミストバーン宛の報告書を記載していたところだった。
　そこへ、彼の側近として仕えているくさった死体の男が、いつものように、執務室を訪れたのだ。
「失礼いたします、ヒュンケル様。」
　くさった死体の男は、いつも通り、丁寧に彼の主に頭を下げた。
「どうした、モルグ。」
　モルグと呼ばれたくさった死体の男は、主の言葉に短く答えを返した。
「ミストバーン様からの賜り物がございまして。こちらにお持ちしてもよろしいでしょうか？」
「・・・かまわんが。」

ミストバーンが、ヒュンケルに物を下賜することはさほど珍しくはない。だが、この日は、ヒュンケルはモルグの言葉に、普段はない、もったいぶった大仰な言い方を感じ、違和感を覚えた。
　モルグは、ヒュンケルの許可を取ると、いったん、扉の外に消えた。
　そして、再び戻ってくると、その背後に一人の見慣れない少女を連れていた。
　ヒュンケルは、眉をひそめた。
「・・・なんだその娘は。」
「ミストバーン様からの賜り物です。」
　モルグはこともなげに言った。
　ヒュンケルは、その面に訝し気な色を強め、一層眉をひそめた。
　少女の肌の色や耳の形から、彼女の種族が見て取れる。白い肌に、金の髪。
　この魔界では珍しい、人間の娘だった。
　年の頃は１５～１６歳くらいだろうか。ヒュンケルと変わらないように見えた。
　ヒュンケルの声を耳にしたのだろう、モルグの背後にいた少女がおずおずと顔を上げた。ヒュンケルと目が合う。すると、少女は、ヒュンケルを見て、驚いた表情を浮かべ、そのまま固まった。その表情の意味は、すぐに理解できた。
　ヒュンケルはモルグに尋ねた。
「・・・この娘は、人間、だな？」
「はい。」
「ミストバーンが、俺に、と？」
「はい。」
「・・・どういうことだ。」
　ヒュンケルの問いに、モルグは手短に答えた。
「このお嬢さんは、山の神への貢ぎ物です。」
　側近の男は、そのまま言葉をつづけた。
「地上と魔界には、あちこちに接点があり、そのような場所では、魔族の存在が、さまざまな伝承として、地上の説話や昔話の中に残されている、ということはご存じですね。」

「無論だ。」
「例えば、荒ぶる山の神、だとか、鬼神、などとの伝承については、実際は、強力な魔族がその正体であった、ということが度々ある、ということも、ヒュンケル様はご存じですよね。」
「当たり前の話を繰り返すな。それがこの娘とどういう関係があるのだ。」
　ヒュンケルは、いらだちを隠さずに、モルグに問いただした。もったいぶった言い方は彼の好むところではない。
　モルグは、かまわず、言葉をつづけた。
「このお嬢さんの村でも、荒ぶる山の神の伝承が残っていたようです。そして、村人たちは、その怒りを恐れて、数年に一度、山の神に若いお嬢さんをささげていたそうですよ。今年は、このお嬢さんがその役目を負ったのでしょうな。
そうですね、お嬢さん。」
　少女は、下を向いたまま頷いた。体の前で合わせた両手が震えていた。
「その地域が、たまたまミストバーン様の所領の一つだったということです。せっかく無傷で手に入れた若い人間の娘ですから、ミストバーン様は、ヒュンケル様にお遣わしになられたのでしょう。
　この館には、魔族の侍女もおりますが、ヒュンケル様と同じ、人間の娘も必要だと思われたのではないでしょうか。
　お館に置かせていただきますが、よろしいでしょうか？」
　だが、ヒュンケルは、直ちにモルグの提案に異を唱えた。
「いらん。侍女ならば、魔族の女どもがいよう。いまさら人間の娘など館に置いてどうするのだ。」
　そして、彼は、人間の少女に視線を移すと、初めて彼女に声をかけた。
「そこの娘、俺はお前を拘束するつもりはない。帰りたければ、故郷に帰るがいい。」
　その言葉に、モルグはため息を吐いた。
「・・・それは、無理でございますよ、ヒュンケル様。」
「どういうことだ？」
「このお嬢さんは、もはや生まれ故郷に帰ることはできません。」

モルグは、短い言葉で断言した。そして、そのまま、説明をつづけた。
「仮に、お嬢さんが、故郷に戻ったとしましょう。そうしたら、村の者は、このお嬢さんに怒りを向けるでしょうな。何で帰ってきた、山の神の怒りが村に向いたらどうするつもりなのか、と。」
　モルグの言葉に、少女は両手を握りしめて一層うつむいた。きつく、唇をかんでいる。
　モルグは、ちらりと少女を見やったが、彼女に言葉はかけなかった。
「そうして、何か、悪いことが起きた際には、すべてこのお嬢さんのせいにされるでしょうな。それが戦争や、飢饉、疫病など、このお嬢さんから見てどうしようもないことでも。
　村の者はこう言うでしょう。
　お前が山の神の元に行かなかったから、村に災いが起きたのだ、とね。
　そうしたら、お嬢さんは、悪くすれば、村の者の手にかかって命を落とすことになりましょうな・・・。」
　ヒュンケルは、モルグの説明に、不快そうな表情を強めた。彼の語る未来は、いずれにしても、ヒュンケルの望むところではなかった。
「・・・俺が、この娘を引き取らなければどうなる。」
　ヒュンケルの問いに、モルグはまたしても淡々と答えた。
「ミストバーン様のお気持ち次第でしょうが、ミストバーン様がお館に置かれるか、あるいは、素体として扱われるか、でしょうな。」
「素体？」
「実験材料ですよ。」
　モルグは、こともなげに言った。
「ミストバーン様は、暗黒闘気の研究をされておりますし、ミストバーン様の他にも、さまざまな実験、研究をされている魔族はおります。そのような方にとっては、無傷の人間は、それなりに価値がございましょう。
いずれにしても、長くは生きられませんでしょうな。」

本人の目の前で、モルグは残酷な未来を予言した。モルグの背後で、少女の肩が震えているのが見て取れた。
　モルグは、うやうやしく、彼の主に尋ねた。
「お館に置かせていただいて、よろしいでしょうか。」
「好きにしろ。」
　ヒュンケルの許可を受けて、モルグは、彼に丁重に頭を下げた。
　モルグは、小さな村で生贄とされた人間の少女を伴い、執務室から出て行った。
　気分を害したヒュンケルは、それ以上、報告書の作成をつづける気にならず、紙の束を机にたたきつけると、ため息をついて、椅子から立ち上がった。
　ヒュンケルは、ソファに身を移し、そこに身体を沈め、天井を見上げた。
　珍しく人間の娘など見たせいで、彼の中に地上での思い出がよみがえった。
　彼の記憶の中にある、地上の世界の思い出の中には、常にアバンがいた。
　彼にとって、地上の世界とは、人間の社会とは、アバンと旅をした２年間がそのすべてだった。
　だが、その思い出は、彼にとっては、憎悪と屈辱で彩られていた。
　灰となった父の傍らで白刃を手にしていた勇者の男に対する、消えない憎悪。
　復讐を果たそうと剣を向けたものの、返り討ちに遭った、忘れえぬ屈辱。
　普段は蓋をしている記憶が立ち上り、ヒュンケルは、きつくこぶしを握り締め、唇を噛んだ。
　アバンとの旅の中、市井の人々と触れ合う機会があった。
彼らは、それまでの魔王軍侵攻の記憶が夢であったかのように、平時の暮らしを取り戻していた。
そう見えた。
魔王ハドラーの侵攻におびえ、息をひそめていた人々が、まるで穴倉から出てきた鼠のように這い出し、この地上が我がものであるか

のようにふるまっている。その陰でおびえ始めたモンスターたちに心を配るわけでもなく。
いまから思い返すと、こうとしか思えなかった。
ヒュンケルはため息をついた。
　そうしているうちに、モルグが戻ってきた。
　ヒュンケルは、誰に話しかけるわけでもなく呟いた。
「・・・醜悪なものだな。弱いものが徒党を組み、より弱いものを虐げる。」
　モルグは、ヒュンケルの言葉に頷いた。
「それが、人間の社会でございましょう。魔族やモンスターとは異なります。」
　モルグの言葉に、ヒュンケルは亡き父を思い出した。
　そうだ、ヒュンケルが地上を旅していた時、あの人間たちの安穏な暮らしは、彼の父の死の上に成り立っていたのだ。
　人間の社会は、常に何者かの犠牲の上に成り立っている。
　ヒュンケルは、つぶやいた。
「それが、人間の社会であるならば、いっそ、魔族に支配されてしまえばよいものを。」
　目を閉じたヒュンケルの脳裏に、再び、アバンとの旅の思い出がよみがえる。
　憎悪と屈辱しかなかったはずのその中に、ふと、あたたかな記憶があることに気付き、ヒュンケルは戸惑った。まるで、泥の中の砂金のように、それは輝き、ヒュンケルの脳裏に鮮やかによみがえった。
　あれはどこでの出来事だったのか。
　アバンと訪れた、森の中の小さな村。
　まだ幼かったヒュンケルの手を、彼よりもずっと小さな、しかし、力強い手が握りしめた。
　記憶の中で、あどけない、幼い少女が、桃色の髪を揺らし、彼を見上げて微笑んだ。
　もう、名前も思い出せない。
　だが、その笑顔だけは脳裏に焼き付いている。
「・・・あの娘も、同じように、どこかで虐げられているのだろう

か・・・。」
　ヒュンケルのつぶやきに、モルグは首を傾げた。
「ヒュンケル様？」
　ヒュンケルは慌てて身を起こした。思い出に沈んでいるうちに、我知らず、思考が口をついて出たことを恥じた。
「いや、なんでもない。」
　モルグは、ヒュンケルをねぎらった。
「お疲れでございましょう。今日はもう、お休みください。寝室に、お茶をお持ちいたしますゆえ。」
　そう言って、頭を下げると、モルグはまた執務室を出て行った。
　一人になったヒュンケルは、自分の手元に目を落とした。
　己の手を広げ、かつてそこに重ねられた小さな紅葉を思い出す。そしてまた、同じ言葉をつぶやいた。
「弱いものがより弱いものを虐げる。それが人間の社会ならば、いっそ、魔族に支配されてしまえばよいものを・・・。
　そうすれば、この手で守ることもできる・・・。」
　遠い記憶の中で、幼い少女が彼を呼ぶ声がする。
　本当は、自分が何を望んでいるのかもわからないまま、ヒュンケルは思考を閉じた。
　感傷は不要だ。
　そうして、彼の前に敷かれた道を一歩踏み出す。

　地上への侮蔑をこめて。